雨やさめ

――受賞作品概要

小畠千佳

読書をしていた私は、決めていたページまで読み終えると、赤いペンで丸を入れた。デスクダイアリーの今日、六月十一日の欄には、細かくスケジュールが書き込まれている。このスケジュールは、自分で考えたものだ。家事のことから、趣味の項目まで細かく書き込んでいる。

このダイアリーを使い出したのは、私が三十八歳になった今年四月、夫の遼一の転勤で東京都三鷹市から兵庫県尼崎市に居を移してからのことだ。以来私は、自分で作り出したこのスケジュールと格闘しながら一日を送っているのだ。

このダイアリーさえあれば、私は余計なことを考えなくて済む。誰も知り合いがいない土地にいることも、遼一の転勤に伴うため十五年も働いた会社を辞めたことも。

そして、身を切られるような思いをしてあきらめたあのことも。みんな何ひとつ考えなくていいのだ。

その時、サイレンを鳴らしたパトカーがすぐ近くで停まったような気がした。急いでベランダに出て、下を見た。外は雨が降っている。

会社が社宅代わりに借り上げているこの部屋は、マンション群の一角にある。この棟の下にパトカーが一台停まっていたが、見える範囲では何事もなかった。ベランダから見る空は厚い雲に覆われている。さっきまで読んでいた小説の言葉を思い出した。

――まさしく雨やさめ。

注釈には、さめ、も雨を指し、雨とさめ、二つ重ねて雨が多く降るという意味から、ひどく涙を流して泣くことを形容する語、とあった。

雨やさめ。

小さくつぶやいたその声は、やけによそよそしく、冷ややかに聞こえた。

エレベーターを降りると、エントランスでは数人の女性が話し込んでおり、その中の一人が私を呼び止めた。隣室の柏木昌江で、一人で住んでいる。

六十代半ばに見える昌江は、いつも黒ずくめの服装をしていた。

「ちょっと仙堂さん、またやねん」昌江は声を上げ、大げさに手を振った。「つねり魔、つねり魔よ」

問い直したが、昌江は次にエレベーターから降りてきた女性の元へ走り寄っていった。

輪にいた人が、話を引き取って説明してくれた。

「このマンションに、子どもをねらった変質者が出てるんやて。四、五歳くらいの子を建物の隅へ連れ込んで、そこで頬を思いっきりつねるんやて、その女」

「女？　女なんですか」

「そうらしいわ。で、今日はここの九階の子がやられたらしいわ。警察も来て、さっきまでそこにパトカーおったんよ。これで三人目らしい。小さい子どもさんのいるとこは、大変やと思う。男の子のいるとこは特に」

「男の子？」

「そう、狙われたん、みんな男の子らしいねん。お宅も気をつけた方がええよ。お子さん、男の子？」

戸惑っていると、昌江がまた輪の中に入ってきた。

「こんなに毎日雨が降るからやわ。こんな日が続くと、頭のおかしい人はどんどん狂い出すねん。きっとまた変質者が出るんやわ」

エントランスの前に一台のタクシーが停まり、その中から若い女性が、男の子を抱いて降りてきた。二人は、今日この棟で「つねり魔」に遭った子どもとその母親なのだということが、すぐに分かった。

子どものつねられた片頬にはガーゼがあてがわれていた。けれど反対側の頬は何の傷もなくつるりとしていて、今にもこぼれ落ちそうなくらいふっくらしている。

私はその場を離れた。なぜか心がはやり、気持ちが高揚してくるのを感じていた。

その夜、私は遼一に今日の出来事を話して聞かせた。だが彼は曖昧に頷いたきり、話に乗ってこない。

遼一は私の話に興味がない訳ではない。本当は、子どもの話題を口にするのを、できる限り避けたいと思っているだけなのだ。

結婚して二年目に判明した子宮内膜症が原因で、私たちは不妊治療を受けていた。五回にわたって受けた体外受精も一度は妊娠したものの、二十週を目前に流産してしまい、それ以降は、何の成果も得られなかった。

最後に体外受精を受けたのが今年の一月で、この時もよい結果を得られず落胆しているところに転勤が決まったのだった。そして遼一は、これを機にもう治療は終了しようと言い出した。私も、もう終わりにする時期が来ているのだと分かっていた。

遼一は私の不妊が分かってからずっと、子どもはいなくてもいい、夫婦二人で仲良く暮らしていこうと言い続けた。そして治療が無駄に終わった今も、こうして子どもの話は避けて通ろうとしている。

明くる日の午後六時を過ぎた頃、部屋のチャイムが鳴った。

玄関を開けるとそこには、七十代くらいの男性が立っていた。隣の棟に住む、春田と名乗った。マンションの自治会の者だという

「ご存じと思いますが、昨日この棟に変質者が出まして」

「ええ、そのことは」

「変質者が出たのは昨日の一時すぎで、ここと、上の階との間にある非常階段に子どもが連れ込まれたんですよ」

「非常階段、ですか」

そう言うと私も廊下に出て、春田が指差す方を見た。
「で、今日はこの件に関してお気づきになったことはないかとお伺いしたんですよ。自治会としては、自衛手段しかないと、こうして情報を集めて回っているんです」
外の闇へ目を向けた。静かな雨の音がする。
「その変質者、女なんですってね」
私は春田を見つめて言った。
「そうらしいですね。母親よりは年上だと言っているらしいですよ」
「じゃあ、ちょうど私くらいの年の女ですね」
春田は驚いたような顔をして私を見た。
「あなた、もしかして不審な人を目撃したのですか」
「いいえ、違います」
答えた声はかすかに裏返り、自分でも不自然だと思った。犯人とは何の関係もない。だが胸は躍り、次第に感情が高ぶってくるのを感じていた。
「集会所を本部として、自治会の者が交替で常駐することにしたんですよ。不審者を見つけたとか、何か思い出したようなことがあれば遠慮なく来て下さい」
春田はそう言うと帰っていった。私はもう一度非常階段へ目を遣った。
あの日から一週間、警察は現れなかったし、また変質者が出たという話も聞かなかった。
ふと思いつき、非常階段へと足を進めた。
あの子、ここでつねられたんだわ。
ここで何があったんだろう。思いを巡らせる。しばらく佇んでいたが、そのうちドアが開く音がしたので、見つからないよう慌てて非常階段を下りた。
犯人は子どもをつねった後、こうしてここを駆け下り逃げたのかと思うと、なぜか腹の底から笑いがこみ上げてきた。気づかないうちに、私は微笑んでいる。私は今逃げている。捕まらないように。逃げる、逃げる。
エントランスで、ちょうど昌江と出くわした。
「ねぇ、こんなに降ってたら、また出るよ、変質者」
そして内緒事を言うように声を潜めた。
「犯人はね、ピンクの花柄の傘を持ってたんやって」
「……」
「息子は孫連れてようここへ遊びに来るんやけど、今は来たらあかんって言うてるんよ。すぐに来たがるから」
昌江は延々と孫の話をしたあげく、さっさとエレベーターに乗り込んで行ってしまった。
自治会の人が詰めているという集会所に来てしまった。中を覗くと、テレビを見ている春田の姿があった。
「事件、どうなったかと思って」
「そうですか。まあとにかく上がってください」
春田は手慣れた手つきで茶を入れてくれる。私はその仕草を見つめていた。
あの日のことを思い出す。体外受精に成功し喜んだのもつかの間、流産してしまった日のことだ。病室で横たわっていた時、いたたまれない思いで泣いていると、遼一は慰めの言葉と共にこう言ったのだった。
——男の子だったよ。
「はい、どうぞ」
我に返ると、春田が私の前に湯飲みを置いていた。
「犯人はピンクの花柄の傘を持ってたんですってね」
「そうらしいですね。よくご存じで」
春田は大きな咳払いをして言った。
「子どもを傷つけるなんて信じられないですよ。子どもがなにか悪いことをしましたか。子どもを憎むなんて人間のする事じゃないですよ」
「違います。子どもが憎くてやってる訳じゃないんです」
「犯人がですか」
「そうです」
「憎いのでなければ、何なんです」
——男の子だったよ。
あの日病室で遼一が言った言葉。知らなければよかった言葉。自分の失くしたものが、はっきりと形づけられた言葉。
この先、一生私を苦しめるだろう言葉。あの時の遼一の声が何度も蘇る。
「犯人はどうしようもなくたまらなくなってその頬に触れてしまったんです」
「お宅は、やっぱり犯人をご覧になったのですか」
「いいえ、違います」
私と春田は、老夫婦のように何の会話もなく、向かい合ってお茶を飲んだ。
集会所から出ると、雨は上がっていた。散歩がてら、歩いて十五分ほどの大型スーパーへ買物に行った。
ウィンドウショッピングをし、そろそろ帰ろうかという頃、色とりどりの傘がワゴンに山積みになっているのを見つけた。ふらふらと近寄り、傘を選び始める。そして自分がなにをしているかに気づいた。私は知らないうちに、ピンクの花柄の傘を探しているのだった。
財布から代金を出し、スーパーを出た。帰ってきて郵便受けを開けると、一通の封筒が入っていた。それは不妊治療をしている人のサークル会報誌だった。
こんなの嘘ばっかり。会報を投げ捨てた。
愛している者を壊したい、ひねり潰したいというあの素晴らしい気持ち。
子どもが欲しくてたまらない女、でも手に入れることができない女。そして欲しかったのは男の子——。きっとそうに違いない。私は確信する。きっとあの変質者はそういう女なのだ。
朝からまた雨が降っている。今日は堂々とあのピンク色の傘を使えるのだ。うきうきとした気分で階下に降りると、また昌江を入れた主婦たちが話し込んでいた。
「あんたもどう。息子らがおみやげ持ってきたんよ」
そう言うと昌江は、菓子箱を開けて私に向けた。昌江の言葉に違和感を感じる。
「息子さんたち、いついらしたんですか」
「……昨日」昌江は声を低めて言った。
「昨日来て、夕飯食べて帰ったわ。うるさくしたかな」

昌江はぶっきらぼうに答え外へ目を遣る。そこには、通り過ぎていく春田の姿があった。私はすぐにその場を離れた。小走りで春田に追いつく。

一緒に歩きながら春田は、昌江とは去年、自治会の役員同士だったと言った。私が息子からの土産をもらったと言うと、春田はしかめ面をした。

「嘘ですよ。あの人話作ってばっかりだから。息子がいるみたいだけど、ほとんど絶縁状態らしいよ。本当は孫に会いたくても会えないっていう身の上なんじゃないの」

後ろから近づいてきた車は、速度を落として、ゆっくりと走り去って行く。

「今からパトロールですか。ご一緒してもいいですか」

二人は五号棟へ着いた。非常階段へ出て、一段ずつ下りて行く。

ねぇ春田さん。声をかけると、春田はゆっくりと振り向いた。

「犯人はピンク色の花柄の傘を持ってたってことですけど、ねえ、こういう傘なんじゃないですか」

そう言うと、春田の前に自分の傘を差し出してみせた。春田は何も言わず傘を見つめたまま、眉間に皺を寄せた。

「初めはきっと偶然だったんですよ。でもエスカレートして。もう、触りたくて触りたくて、仕方がなくなって」

「あなた、六月四日の一時頃どこにいらっしゃいました」

「家にいました」即答する。「その時間は私、本を読むことにしてるんです。毎日決まっていますから。でも証人はいないですね。どの日もみんなアリバイないですね」

だって犯人は、私なんですから。そう言いかけてやめた。春田は私の方を、ちらりとも見なかった。

私は春田の後を追い、くるくると階段を下りながら、もう一度心の中でつぶやいた。

私が、やったんですよ。

口に出して言いたくなる。本当に、私がやったんですよ。だってほら、私、ピンク色をした花柄の傘だってここに持っているんですからね。

それから一時間ほどパトロールにつき合った後、私は集会所の前で春田と別れた。

今日の予定は崩れてしまった。遼一へメールを打つ。

外でごはん食べよう。近所のコンビニで待ってます。

遼一からの返信はない。

すっかり日は暮れている。棚にあった雑誌をあらかた読み終えた私は、目の前のガラス窓を見つめた。

子どもはいなくても構わないと言った遼一。二人でいればそれでいいと話していた遼一。

でもあれは、最初の体外受精が成功した時だった。あの時遼一は、妊娠したという私の言葉を聞くなり泣き出したのだった。それからしばらくの間、嬉しいと言って泣き続けたのだった。

目の前のガラス窓を見つめた。そこに映った私のその頬を、別の私が思い切りつねる。そしていつの間にか私は、幼児の頬をひねり潰すように、手を掛けている。かわいいね、もっと泣いて、もっと痛いって言ってみて。

雨やさめ——。雨が降っている。涙が流れている。誰かが泣いている。

外はどしゃ降りの雨である。今日一日をソファーに寝そべったまま過ごした。

部屋のチャイムが鳴った。春田だった。

「仙堂さん、捕まったんですよ、犯人が」

「……犯人って、あの、子どもを、つねる……」

「そうですよ、他にどんな犯人がいるんですか」

「……犯人はどうして、どうして子どもをつねったのですか」

「そんなことまだ分からないですよ」

憎くてやったんじゃない。心の中で叫ぶ。かわいくてたまらなかったから、手に入れられないことに耐えられなかったから、だから子どもに手を掛けたのだ。絶対そうに違いないのだ。

その時、ちょうど昌江が帰ってきた。春田は言った。

「柏木さん、犯人が、つねり魔が捕まったんですよ」

昌江はうつろな目をして立っていた。彼女はいつものように黒ずくめのいでたちだった。いつもと違うのは、もう一本、鮮やかなピンク色をした、花柄の傘を持っていたことだった。

昌江と目が合った。彼女に微笑み、目で語りかける。

あなたも買ってしまったのね。

ここにも私たちと同じ女がいる。

私はこみ上げてくる笑いに耐えきれず、声を上げて笑い出した。春田は訳が分からないような顔をして、私を見つめていた。

第10回神戸エルマール文学賞受賞を祝う会

第10回総会（基金会員・維持会員で構成）

第10回受賞式及び祝う会

日時　二〇一六年十月三十日（日）
　　総　会　十三時から
　　受賞式及び祝う会　十四時～十六時
場所　ラッセホール　二階「ブランシュローズ」の間
　　〒650—0004　神戸市中央区中山手通4—10—8
　　電話078・291・1117
会費　七千円